照的な事例が示すように，「難民」の発生はネイションという擬制的な概念に支えられた国民国家の擬制性に帰結し［加藤 1994］，また難民の帰還への意識や自己認識も国家が誰を「国民」とみなすかに規定される．元来域内移動が盛んであった元英領インドの諸地域で生まれた「難民」は，独立―国家樹立のプロセスにおける「真正な国民は誰か」をめぐる対立や交渉のなかで生まれたのであり，彼らの辿った軌跡の多様性はその恣意性を浮き彫りにする．国家の恣意性によって一方では国籍を否定され，他方では国民として統合されることになった分離独立難民は，難民を「国家を必要とする者」とみなす国民国家制度を前提とした難民問題の議論に大きな問いを投げかける存在である．

引　用　文　献

加藤　節．1994．「国民国家と難民問題」加藤節・宮島喬編『難民』東京大学出版会，1–20．

Chatterji, J. 2012. South Asian Histories of Citizenship, 1946–1970, *The Historical Journal* 55(4): 1049–1071.

Chowdhory, N. 2019. *Refugees, Citizenship and Belonging in South Asia: Contested Terrains*. Gateway East: Springer Singapore.

古澤拓郎．『ホモ・サピエンスの 15 万年―連続体の人類生態史』（叢書・知を究める　15）ミネルヴァ書房，2019 年，274 p.

寺嶋秀明 *

21 世紀という時代に入ってはや 20 年が過ぎたが，前世紀前半における悲惨きわまりない世界大戦の反省のうえに打ち立てられた平和主義，国際協調，共存共栄などの戦後世界の理念や秩序が大きくくずれ，世の中は分断と対立，扇動と盲従，知恵よりも武力・金力，巨大な格差や貧困の蔓延，人権の空洞化，多様性の否定といった，かつて通った道へと戻りつつあるようだ．日本でも世界でもさまざまな分野で人と人を区別し差別する風潮が蔓延し，まちがった歴史理解や科学知識に基づく差別，自己中心的な差別，そして空虚な言葉のやりとりが横行している．本書はそのようなあやうい時代へ一石を投ずる人類学的啓蒙書である．

著者は「あとがき」で次のように語る．「この本の趣旨をあらためて考えてみたい．人間は同じ一つの生物ホモ・サピエンスであり，それが多彩な姿をしめす連続体＝スペクトラムなのだということを書いてきた．これによって私たち人間はお互いに差別はできない連続した存在であるし，異なる文化や異なる身体形質を持つことと，それを理解し尊重することの大切さを示してきたのである」（p. 243）．たしかに上記のような時代だから

* 神戸学院大学人文学部

こそ，著者のいうように，われわれホモ・サピエンス自身についての生物学的ならびに社会・文化的に正しい理解がとりわけ必要なのである．

ホモ・サピエンスは遺伝的にはきわめて均質性が高い生物である．それは生物学的形質ばかりではなく，根本的な社会性としてもそうである．一方，地球上の人々の生態や社会・文化は表面的には千差万別である．どうしてそうなのか，それを解明するのがさまざまな人間の生き様に興味を抱く人類学者の仕事である．そして，地球上のありとあらゆる地域に足を運び，長期の参与観察という調査手法を用いて，現地の人々の生活の隅々や心の中まで覗き込んできた．その多くの人類学者が一様にびっくりするのは，外見的にどんなに異様であっても，また，とても自分たちと相容れない暮らしと思っても，彼らとの間に心身の深みにおける共通性を見出すからである．

著者は気鋭の人類生態学者で，その研究は，公衆衛生学，医学，保健学，遺伝学などの理系の方法論に軸足を置きながら社会的・文化的面にも気を配り，さまざまな自然環境・文化的環境への人の適応のあり方を探求している．オセアニア地域を中心にフィールドワークにもとづく研究を重ねており，多くの論文や著作がある．著者自身による魅力的な HP もアップされているので，ぜひ訪問していただきたい〈https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/furusawa/〉．

本書は以下にみるように序章および終章と 6 つの章から構成されており，第 1 章から第 6 章には 4 ないし 3 つの節が設けられている．

序章　スペクトラムで人類の歴史を見る
第一章　人間の起源から
1　人間の壮大な旅と個人的なコンプレックス
2　肌の色では何も区別できない
3　体格の違いは適応なのか
4　人種という区別を考える
第二章　生物としての私たち人間
1　性別を連続的に見る
2　フェロモンで異性を惹きつけられるか
3　食人習慣とプリオン病と進化
4　オランダ飢餓の冬とエピジェネティクス
第三章　文化の基底
1　生業と食べ物による適応
2　個人主義化した社会のうつ病
3　東アジアの人は酒に弱いのか
4　自然をみて季節を知る暦
第四章　行動の進化
1　なぜ男は狩りをするのか
2　伝統社会は自然を保護してきたのか（1）最適採食理論から
3　伝統社会は自然を保護してきたのか（2）保全倫理から
第五章　病気の起源
1　感染症と適応
2　適応が病気のもと（1）肥満と糖尿病
3　適応が病気のもと（2）塩と高血圧
4　マラリアと DNA
第六章　現代の課題

1　人間における格差の始まり
2　「喪われた女性たち」は差別か適応か
3　持続可能性は「可能」か―二つの島の物語
4　世界食料危機とアジアの食文化
終章　永遠の生命・一つの連続体

近年なにかと社会の話題となっているテーマが盛りだくさんである．昔から論じられているが解決していない問題，論争的テーマも少なくない．早急に対応が必要とされる社会的に重要な問題もある．それらに挑む第一の武器として著者が手にしているのは，現代において急激な進歩を遂げてきた遺伝子解析によるデータである．

さまざまな遺伝子がとりあげられている．人の肌の色を決める遺伝子，性（sex）をつかさどるXY遺伝子，ネアンデルタール人やデニソワ人とサピエンスの共通遺伝子，フェロモンや異性選びにかかわる遺伝子，ニューギニアの奇妙な風土病を引き起こす異常プリオン遺伝子，アフリカサバンナでの古代人の生活や，戦争時の飢餓という逆境体験に起因する倹約遺伝子，飲酒適量を決める遺伝子，離乳後も乳を飲めるようにする乳糖分解酵素とそれに関連する遺伝子，生業文化と共進化する遺伝子，マラリアやうつ病にかかわる遺伝子などである．さらに一卵性双生児における表現形の相違や，飢餓経験者の子孫に出現する形質にかかわるエピジェネティクスという現象も紹介されている．

遺伝子とは直結しないが人間の適応や進化を考えるうえで興味深い話題もいろいろとりあげられている．動物一般とは異なり，閉経後の女性がその後もかなりの期間そのまま人生を享受する現象をめぐる祖母仮説や，狩猟採集民たちは日々どのように食物を探しているのかを活動効率の計算から説明する最適採食理論，あるいは食糧危機と肉食問題，和食における獣肉忌避の問題などである．

もっともひとつひとつの話題にあてられている紙幅は多くはない．著者によると，本書は月刊『ミネルヴァ通信「究」』に2015年4月から2年間，24回連載されたものを加筆修正したとのことである．各章各節でとりあげられている多くの話題とその現代性，語り口のなめらかさ，解説のテンポの良さなどは，大学生／大学院生を相手にした講義を念頭に置いたものということで理解できる．評者自身，本書を読み進めながら，この話題は自分の授業でも使わせてもらおうかと思ったものも少なくなかった．

遺伝子とはあまり関係ないがひとつ興味深い話題を紹介したい．第6章「現代の課題」では格差の増大が扱われている．世界の貧困と格差を糾弾するNPOのOxfamによる報告書では，2017年に世界で生み出された富のうち82%が世界の富裕層の上位1%に集中していた．貧困層37億人の富はわずか1%未満しかなかった．さらに2017年度の報告では，世界で最も裕福な8人が貧困層36億人に匹敵する資産をもっているという（評者注：これらの数値については，本書より新しいデータOxfam HP［Oxfam International 2019］を用いた）．

驚くべき現実であるがそれはさておき，著

者はここで人間社会のベースとしては身体的および社会的にどの程度までの格差が認められるか推測する．まず格差のひとつの尺度として 1 日の摂取カロリー量を考えると，その振れ幅はせいぜい基礎代謝量の 3〜4 倍までである．さらに，農耕・牧畜以前の狩猟採集社会では富（身体的富，関係的富，物質的富）の格差も 3 倍程度と推測される．つまり，哲学者のルソーが問題とした自然法が許容する格差の範囲は，生物学的にも社会的にもその程度のものではないかと論じている．この数値はサイエンスとして厳密に考えることはできないが，身体感覚として納得できそうに思う．

中には少々注意すべきところもある．第 4 章の「伝統社会は自然を保護してきたのか」においては，ソロモン諸島の豊かな熱帯林が過去に大きな人為的ダメージを受けてきたという熱帯雨林学者らの論文を紹介し，「現在環境問題になっている森林伐採であるが，かつてはこれと同じくらいの破壊を住民がしてきたのであるから，将来になるとかならずしも破壊的であるとはいえないと述べた」（p. 157）と引用している．誤解を招きかねないところだ．著者もその点に配慮し「ただし，工学的技術が進み，それが途上国にも広がっているため，伝統社会がかつての感覚で自然を破壊していくことが，取り返しのつかないほどの破壊に繋がる可能性もある」（p. 158）と付言しているが，現実的には可能性というよりもすでにそのような状態に落ち込んでいるところが多いだろう．

ジェンダー（社会・文化的性）と生物学的性（sex）との関係も複雑である．第 2 章第 1 節の「性別を連続的に見る」ではジェンダーの連続性が語られた後でミジンコやコモドオオトカゲの生物学的性の話が展開されている．評者の個人的好みとしてはこの部分はたいへん興味深く読ませてもらったが，話の流れとしては，ジェンダーと同じく人の生物学的性についてもどのように連続体なのか説明してほしい．第 6 章第 2 節「『喪われた女性』たちは差別か適応か」では，産卵時の環境条件次第でオス・メスの比率が大きく変わったり，途中で性転換する生物種もあることをもとに，「性とは二項対立ではなく，連続体なものである」（p. 212）と述べられている．ここでは性比の問題とオスとメスの二分法的な生物学的属性が混合しているようだ．人の場合はどうなのかやはり気に掛かる．DSD（性分化疾患）など，生物学的性といえども XY 遺伝子だけでは決まらない問題をとりあげられたらよかったかもしれない．

もっとも本書のなりたちからすると各章各節に割り当てられた紙幅は限られていたので，あまり丁寧な書き方をできなかったのは仕方ない．巻末の引用文献リストも充実しているので，本書を読んで興味をもったり疑問がわいた部分については，自分で積極的に調べてみるとよい．いずれにせよ，冒頭で紹介したように「人間は同じ一つの生物ホモ・サピエンスであり，それが多彩な姿をしめす連続体＝スペクトラムなのだ」という著者のメッセージはたいへんすばらしいものであり，その研究姿勢はおおいに共感を呼ぶだろう．これからの研究の発展に期待したい．

引用文献

Oxfam International. 2019.〈https://www.oxfam.org/en/press-releases/richest-1-percent-bagged-82-percent-wealth-created-last-year-poorest-half-humanity〉(2019.12.12)

河野正治.『権威と礼節―現代ミクロネシアにおける位階称号と身分階層秩序の民族誌』風響社，2019 年，358 p.

紺屋あかり *

本書は，ミクロネシアのポーンペイ島を事例に，近代国家体制下における首長制に伴う位階称号の秩序形成について，対面的相互行為の分析からその過程を明らかにした民族誌である．何よりも本書を特徴づけるのは，「礼を尽くすこと」，そして「返礼すること」というポーンペイの人々による日々のやりとりに対する緻密な分析である．それゆえ本書は，ミクロネシアという地域への関心に限定されることなく，人々の相互行為に眼差しを向ける多くのフィールドワーカーに開かれた同時代的な民族誌となっている．特に本書の事例は，複層化・多層化する現代社会における新たな関係性の構築という検討課題に対して，議論の場を設けている．具体的にいえば，近代と伝統とが入り混ざる場―コンタクトゾーン―において，対面的相互行為がどのような機能をもつのかという問いに対して，現代のポーンペイ島の事例から，礼節をめぐるやりとりを通じて柔軟にフレームを調整していく様が描き出されている．

筆者は，現代のポーンペイ社会の秩序形成においては，異なる 2 つの政治空間の狭間に立ち現れる異質なものがあり，それらが何らかの「ズレ」を生じさせていると言い当てる．ここではその「ズレ」を「あふれ出し」と呼び，ポーンペイの人々はこの「あふれ出し」を，礼節を図ることによって調整していると分析している．2 つの異なる政治が接触することによって生じるコンフリクトは，19 世紀の植民地時代以後のオセアニア社会に多くみられる普遍的な現象である．そのなかで本書が提示した事例―「名誉を認める」というポーンペイ社会の原理においてコンフリクトを調整する様―は，ポーンペイ社会のもつ個別性／独自性の理解を深化させただけでなく，他地域との比較検討の場を開いている．

本書がとるアプローチは，既存研究―伝統的権威論―とは異なっている．それは筆者が述べるように，本書の目的とするところが，位階称号の秩序，ないしは秩序形成を相互行為の次元から捉え直すことであることと深く結びついている．こうした，ポスト植民地国家における政治力学の図式において首長制を論じるのではないという視座が，本書に示された事例の独自性を際立たせている．

本書は第一部「ポスト植民地時代における位階称号と礼節の技法」，第二部「首長の権威と祭宴のポリティクス」の二部構成で，序論，7 つの章，結論から成っている．各部の間には，間奏「『外国人』から『東京のソウリックへ』―称号をもらうまでの道のり」と

* お茶の水女子大学理学部・京都大学東南アジア地域研究研究所